

---

# 満月

ぼろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

満月

### 【Nコード】

N0569A

### 【作者名】

ぼろ

### 【あらすじ】

余命3ヶ月と告げられた。なんとなく過ごしていたところにいきなり見舞いが来た。入院しているのだから見舞いが来ることに問題はない。ただ見舞いの相手が自分の知らない中学生だっただけで

月が登った。その日は満月だった。丸くて綺麗だった。全く欠けていない。そんな満月だった。その日俺こと井上翔太は病院にいた。2・3ヶ月前から体調が良く無かったがなんとなくほっといたが今日どうにも普通の風邪じゃないと思ひ病院に来た。俺の場合風邪が1ヶ月続くこともあったからその内治るかなとも思っていたが治る気配もない。

診察を受けてでた答えは悪性腫瘍、つまりなガンだった。

「余命はいくらあるんですか」

言っで自分で驚いた。いきなりガンと診断されてこんなにも落ち着いているなんて

「紅葉を見ることはないでしょう」

今8月だから後2ヶ月ぐらいか

「早速ですが入院の手続きを取っで下さい。入院すれば雪を見るこゝとが出来るかもしれないですよ」

そう言われて書類にサインをした。

その日の内に身の周りの物を持って入院した。

「後2ヶ月か」

そう独り言を言っでいた。

なんだかあっけない人生だったなあ、やっで会社でもそこそこ認められてきたっで言っでのにそう言えばまだ会社にこのこと伝えてなかつたなそう考えて退職届を書いて会社に行つた。

いつものように自動ドアを通りエレベーターに乗り部署がある部屋に入つた。

いつもと違っでののは退職届を手に持つでいることぐらいだ。上司に席の前に行つた時に

「あれ井上君、今日は休みじゃなかつたかね」  
と言われた

「大変申し訳ないのですが会社を辞めさせていただきます」と言った、なんでも言われて病院の診察のことを話すと

「それじゃあ仕方ないね」と言われた。

その言葉には哀れ身とも嘆きとも聞き取れる感情があった。退職届を出して病院に戻った。

なにもすることがない。

本を読む気分じゃあない。

とりあえずテレビを付けてみたが画面越しにアナウンサーが何か言っている。

だが俺には何を言っているのか分からない。

不意に視界がぼやけた、頬を何かが伝っていった。

「俺は泣いているのか」

いまさら涙を拭うのも可笑しいと思いつまにしている。

すると突然扉が開いた、そこに居たのは中学生ぐらいの女の子だった

「お見舞いに来たよ」

「えっ」

俺には中学生の子どももないし親戚もない、もともと結婚をしていないが

「あ、すみません間違いました」

「いや別にいいけど」

その時あった女の子は岡野美奈と言いその後同じ病院に入院している美奈のお爺さんの見舞いのついでに俺の見舞いにも来るようになった。美奈は

「入院中の人はお見舞いに来てほしいものよ」と言った。

が正直あとあまり生きられないと聞かされた後で見舞いに来てほし

いとは思わなかったが美奈と話しているとなんだか元気と言っか心が温かくなっているのが俺自身感じた。

そんな奇妙と言える関係がはつきりと変わったのが入院して2週間が過ぎようかと言ったときだった。

その日は珍しく美奈が来る時間を2時間過ぎた時だった、扉が開き目を泣きはらした美奈が立っていた

「美奈どうした」

そう俺が声を掛けても何も話さないまま地面に目を向けて、涙をこらえている

「いつも元気いっばいで元気が取り柄のような奴がそんなに涙ばかり流していたらいけないだろ」

俺が言い終わる前に美奈が俺の胸に顔を埋めて来た。

俺はそつと美奈を抱きしめた、するとやつと声をこぼして泣き出した。

落ち着いた所で何があったか聞いてみると

「お爺ちゃんが死んだの」

「それじゃあ思いつきり泣いたらいいじゃないか」

人間悲しい時には泣いたらいい

「なんか泣けなかったの」

「そうか」

「でも翔太さんの所に来たら急に涙が出そうになった」

「俺の胸で良ければいつでも貸すよ」

「ありがと」

それから結構長い間俺の病室に居た

「これじゃあ初めて会った時と逆だね」

「…俺が泣いていたの知っていたのか」

「泣き声が聞こえたから入ったんだよ」

「なんともコッパズカシイ初対面だったのか」

「もう会えないね」

「ん、なんでだ」

「だってもうついでじゃなくなつたから」

「だからなんでだ」

俺には心底分からなかつた

「友達じゃあないのか俺達」

「やっぱり気付いてない」

「…」

「なんとも思つてない人の所に毎日会いに来るかなあ」

鈍い俺にもやっと理解した

「それって」

そう俺が言うとはにかんだ美奈は

「うん、好き翔太さん」

俺の心臓はバクバクと鳴っていた。

今まで生きてきたなかで告白されたことなど無かつたからだ

「でもさすがに年が」

「そんなこと関係無いと思うけど好きなものは好きなんだから」

そう言うとき目を背けた

「関係無いかでも犯罪だぞ」

その言葉は俺自身に対して言ったものだった。

俺自身、美奈の事を異性として意識し始めていたからだ

「犯罪でもいい翔太さんが良いって言ってくれたら」

俺は迷っている。

後1ヶ月の命からか自分自身のなんだかとても危険だと発する信号かは分からないが

「俺はいいが本当にいいのか美奈」

「良く無かつたらわざわざ口にしないよ」

そう言い放ち俺の目を見てくるとても可愛いらしくそして美しいと思った。

気がつく俺は美奈の唇に俺の唇を当てていた。

それはまるで幼い子どもがふざけてするキスのようだった

「翔太さんいきなりい」

「イヤだったか」

そう言い返すと

「イヤじゃないけど」

と言ったが終わりになるに連れだんだんと小さくなっていた

「美奈」

そう言うともう一度美奈に口付けをした。

今度のは相手を貪るように何分もしていた美奈の口の中に俺の舌を入れるとさすがに舌を引っ込めてしまっ、それでも執拗に攻めるとおずおずと俺の舌にも絡ませてくる。

少し過ぎて唇を離れさせる。美奈はぼーっと俺の顔を見ていた

「なんか付いているか？」

「うつんそう言う訳じゃないけど」

「今日はここまでだ」

そう言い美奈を椅子に座らせた。

窓の外を見ると満月があった。

満月はとても綺麗で俺の心に言いよのない不安を与える。

後何回月を見ることが出来るのだろうか、後何回朝日を見ることが出来るのだろうか、そして後何回美奈を…

「月、綺麗だね」

「ああ」

「翔太さん後何日生きられるの」

「いきなりだなあ」

「だって…」

少し間が開いた

「何日なんて関係無いさ生きているうちに幸せなら」

俺はそう言つと美奈に向かって微笑んだ。そうだ生きているうちに幸せなら…

「やっぱり長くないの」

「ああ」

また沈黙が続いた。

その日はそのまま美奈が帰っていった。

次の日も美奈が来た、クラブでこんなことしたとか友達とあんなこと話したとか他愛のないことだったがそれでも美奈と俺は笑った。

一瞬も無駄のないように。

……

いつ死んでもかまわないと思っていた、俺が死んだところで何も変わらないから、俺が死んだところで世界がいつもと同じようにまわ

るから、俺が死んだところで泣いてくれる人がいないから。

でも今は1人になりたくない、いや美奈と永遠に離れたくないのだ。

そんなことを考えている自分を初めて知ってしまった。

「もう少し早く会っていれば」

実際はいつ会おうが変わらないのかもしれないが誰かを思って生きるのは今までと違っていた。

やっと分かったんだ。

人を愛すると言つことを、本当に人に認められると言つことを。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0569a/>

---

満月

2010年10月21日22時19分発行